

近代の歌人 Ⅲ

日本歌人講座



文学博士久松潜一
文学博士實方 清 編

日本歌人講座 第八卷
近代の歌人 III

弘文堂

日本歌人講座 近代の歌人 Ⅲ

近代の歌人 Ⅲ

昭和四十四年五月三〇日 初版発行

定価一、五〇〇円

編者 久松 潜
発行人 鯉淵 年 祐

株式会社 弘文堂

本社 東京都千代田区神田駿河台四の四
電話(二五)七七八六(代表)
郵便番号 一〇〇一
営業所 東京都文京区関口の一四一八
電話(二六〇)四二〇一
郵便番号 一一二
振替 東京 五三九〇九番

あづま堂印刷 若林製本

序

日本の抒情文芸の中心は和歌であり、和歌の中心は短歌である。抒情文芸の本質は抒情性と言う文芸性の中に認識される。この短歌は記紀の和歌から現代短歌に至るまで二千年に及ぶ美的伝統の中に生成発展してきた。この発展の相を文芸史的に見ると四つの大きい美的世界において認められる。それは万葉の世界と古今の世界と新古今の世界と近代短歌の世界とである。これを時代的に見ると上古と中古と中世と近代とである。近世は抒情文芸史の上では一つの谷間であった。和歌はこの四つの世界の中でその本質的世界を美しく表現して来た。この和歌史的展開をその美的内容の上からみると、純一と壮大な世界から典雅と連想の世界へ、そして幽玄と優艶なる世界へと展開し、近世と言う谷間を通じて近代に至り浪漫と写生の上に近代短歌の絢爛たる美的世界を見ることが出来る。万葉の世界が成立するためには記紀の和歌と言う源流の世界があり万葉はここから発展成立し、感動と鑑照との中で壮大純一なる抒情の世界を創造したのである。柿本人麿と山部赤人とはその二つの世界を代表する歌人であった。この万葉の世界によって上古の和歌が形成されたのである。古今の世界は俊成や定家が庶幾した世界でもあって、典雅と連想の中に中古の和歌の世界を形成し、紀貫之・曾禰好忠・和泉式部・源俊賴等の代表歌人を出している。次いで新古今を中心とする中世和歌は上限に千載集があり、下限に玉葉集や草根集によって和歌史上最も光輝を放った中世の和歌の世界を形成し、俊成・西行・定家・爲兼・正徹などの代表的歌人を輩出している。ある意味ではこの中世の和歌によって和歌の本質的世界が形成されたとも言える。近世の和歌に至ると、古典歌集を庶幾する意識の中に、万葉主義の和歌と古今主義の和歌と新古今主義の和歌とが真淵と景樹と

宣長とを代表として形成されたのである。これに加えて現実主義の和歌が万葉主義との関係の中で形成され良寛や言道によって代表された。この近世の和歌は上古の和歌や中世の和歌のように本質的特色を持つものではなく古典歌集の中にその生命を見出そうとしたものである。それが近代になると短歌の世界は見事に開花し、浪漫派の短歌が先ず現われ、次いで現実派短歌と写生派短歌は多くの代表的歌人を輩出し、近代短歌はその極致を示現した。晶子によって浪漫派短歌が極致に達した後に現実派と写生派の中に左千夫・節・赤彦・啄木などが現われ近代短歌は充実と絢爛を競うたのである。そして近代短歌より現代短歌へと多くの歌人を輩出しながら推移して行った。

この和歌の発展の中で和歌史を形造った代表的歌人六十二人を選んでこれを八巻に編成しここに「日本歌人講座」を編集した。本講座は歌人の単なる評論ではない。専門の学者によって精細に研究された歌人論であり、歌人の抒情性の究明であり、その美的世界の認識である。従って現在の学界における歌人研究の最高水準を示すものである。本講座は世上にある雑多な事項や多くの歌人について雑纂的に編集されたのではなく、和歌史の体系を考え上古から近代現代に至る迄の和歌の本質的世界を明らかにし得るように代表的歌人を体系的に整序し、多年に亘って研究を深めた専門の学者によって精細をつくして研究されたものである。幸に和歌研究の専門学者の全面的協力を得てこの「日本歌人講座」全八巻を刊行し得ることは学界のため誠に喜ばしいことである。本講座に對して広く文芸を愛し和歌に関心を持たれる多くの人々の積極的な協力を願う次第である。

昭和四十三年九月一日

責任編集者

久松潜一
實方清

目次

近代の短歌四	實方	清	一
佐佐木信綱	久松潜一	毛	
中村憲吉	扇畑忠雄	三	
太田水穂	上田英夫	三	
窪田空穂	窪田章一郎	三	
川田順	佐藤美知子	三	
釈超空	高崎正秀	三	
吉植庄亮	藤田福夫	三	
土屋文明	木俣修	四	

近代
の
短
歌
(三)

實
方

清

五、アララギ派の短歌（続）	三
---------------	---

（三）古泉千樞の世界	三
------------	---

（四）斎藤茂吉の世界	七
------------	---

六 自然主義派の短歌	三
------------	---

（一）金子薫園の世界	三
------------	---

（二）尾上柴舟の世界	六
------------	---

（三）前田夕暮の世界	三
------------	---

（四）若山牧水の世界	三
------------	---

（五）石川啄木の世界	九
------------	---

七 近代諸派の短歌	三
-----------	---

(三)

近代短歌史においてアララギ派の存在は非常に大きいものであった。近代短歌というものの一つの近代性を与えたものはアララギ派の写実であり写生であったといえる。この広義の写実主義的短歌は近代短歌の本質的世界を形成しているものであろう。それに先だって晶子などの浪漫主義的短歌が古典和歌と区別する一線を画する意味で大きい存在であったが、浪漫主義短歌だけでは近代短歌の本質的世界を形成することは出来なかった。写実主義短歌の存在は近代短歌の本質形成にとって不可欠の要素であった。その中心はアララギ派歌人によって形成されたということも近代短歌史における一つの重点であった。このアララギ派の歌人として島木赤彦や中村憲吉に次いで近代短歌の上に一つの世界を創造している歌人は古泉千樫である。千樫は左千夫の門下であり、左千夫の世界を継承した歌人であると言われる。千樫は明治十九年九月二十六日千葉県安房郡吉尾村で貧しい農夫の子として生まれた。彼は貧農の子として自然の中で成長し、とくに千樫の生れた村は房総山脈と嶺南山脈との間のゆるやかな溪谷であったので、平和でのどかな農村の行事に幼少の時から興味を感じ、房州という暖国の明るい自然風物の中で生きる一つの意義を感じたと思われる。米を作るための四月頃から行われる仕事や麦を作ること、または牛を飼うための草刈りなどに自然の中に生きる喜びと苦しみとを千樫は感じたと思われる。彼は二十二歳の頃まで郷里にいたので、自然との関係がその生活の中に深く感得されて行ったようである。千樫は小学校卒業後は農業の手助けをしたり、また小学校の代用教員をしたりして純樸な少年として次第に成長して行ったのである。この農村での少年から青年への生活は伊藤左千夫によく似ているのである。彼は明治四十一年五月まで郷里の農村で生活が続けていたのである。この四十一年五月までを作歌生活の第一期として考えることが出来る

であろう。だから千櫨の第一期は明治三十五年十七歳のときから四十一年五月までの約七年間である。これは彼の習作時代であり、または在郷時代ということが出来よう。彼は明治三十二年十四歳のときに雑誌「心の華」を読んで「万朝報」に投稿したといわれる。「心の華」に投稿した歌がはじめて出たのは明治三十五年十七歳のときであり、「心の華」第五巻第一号であった。それは「ほのぼのと富士の山より明けそめて三保の松原鶴鳴き渡る」という歌であり、ありふれた古今調のものである。これは年少の歌であるから啄木のように模倣の域を出ないのであり、個性的なものは全然みられなかった。これから次第に根岸派短歌に接近し、明治三十七年には「馬酔木」において伊藤左千夫の激賞を受けた歌を発表している。それは「耕余漫吟」と題する十二首の短歌で古泉浩哉の名で出されている。この十九歳のときがその師を知り歌人として出発する機縁となったとも考えられる。この十二首の歌に対して左千夫は「一見平淡少しも巧みを求めず而して精神自ら新しき所あり」と賞しているのである。その後千櫨の左千夫への傾倒は次第に加わり、左千夫の歌と人間への崇敬は非常なものであった。同じ千葉県の子であるという同郷の思いも加わって、千櫨は明治四十年五月に左千夫を訪ね、そのときから左千夫先生という言葉を用いている。千櫨は明治四十一年五月堅い決心で郷里を去って上京した。彼は短歌の世界で何かをなしたいという熱烈な希望と野心とを胸に秘めて上京したことがうかがわれる。この上京の前後のことを示現しているものに短篇小説的な連作があり、「屋上の土」の中の「郷を出づ」「鉄橋」「煙塵」「住止」等の中にみられる。千櫨の生活意識の中には短歌という芸術に生きることによって全生命を燃焼し得るものがあつたのである。しかし上京後の現実はいさびしかった。学歴を持たない青年が東京で生きることが容易ではなかった。それはその年の十一月から二十一年間に亘って続いた帝国水難救済会事務員の薄給生活が彼の現実生活そのものであった。この貧しい生活の上に彼は歌人としての生活を築いて行つたのである。このような現実生活の中に歌を作つて行つ

たのである。彼は明治四十二年二十四歳のとき結婚している。これから大正十二年までが第二期と考えられ、アラギ時代である。

千樫の第一期の歌は習作ともいふべきもので、アラギ派短歌としての本質を示現しているものではなかった。千樫の第二期の歌はアラギ派時代のものであるが、先ず明治四十一年から大正五年頃までの歌を考察してみよう。これは「屋上の土」と「柑子の花」によってみられる。

- (1) 椎わか葉にはひ光れりかにかくにわれ故郷を去るべかりけり
- (2) さ夜ふかなくなりこほろぎ心ぐし人もひそかにひとり居るらし
- (3) かぎりひの夕棚雲の心ながくながく待つべみ君のいひしを
- (4) ねむの花匂ふ川びの夕あかり足音あきとつましくあゆみ来らしも
- (5) 世に背くかなし恋ゆゑこもりのみなげきすぎなむ吾れが一生は
- (6) うちかぶさる灰燼のなかにわが家は小さく残りてあかりつきたり
- (7) 夜は深し燭を続ぐとて起きし子のほのかに冷えし肌のかなしさ
- (8) 桃のはな遠とほに照る野に一人立ちいまは悲しも安く逢はななくに
- (9) ひたひたに波に唇触りあふむきて遠き雲の根ゆるぐを見るも
- (10) こほろぎはいとどあまねく鳴きふけりわがひとり寝の夜半のしたしさ

この歌の中にみられる千樫の歌風はアラギ派の流れと言っても子規や左千夫とは少し異っている。写実主義的な表現手法はあるが、写実に徹したものではなく、その写実の中にやさしい情懷がつねに漂っている。自然を写実した中につねに情懷と感傷とがにじみ出ているものを見るのである。とくに(4)の「ねむの花匂ふ川びの夕あ

かり」の歌や(8)の「桃のはな遠に照る野に一人立ち」の歌などは写実と浪漫との全き調和の上にみられる独特な世界を形成している。これは千櫨の第二期における特色であるということが出来るであろう。尚大正十三年頃までの歌教育をあげてみよう。

(1) 山峡に道入らむとすかへり見れば海きららかに午後の日照れり

(2) ゆく道は夕づきにけり日のてれる山のいただき見つつ悲しも

(3) 茱萸^{ぐみ}の葉の白くひかれる渚^{さへ}みち手ひとつるて海に向き立つ

(4) 闇をゆする浪のとどろきとどとしてわが胸痛し夜いまだ深し

(5) 雨ながらこれの峠^{たて}にきたりけりわが村かたは霧ただに白し

(6) うつし身のわが病みてより幾日へし牡丹の花の照りのゆたかさ

(7) 夕ふかしうまやの蚊遣燃え立ちて親子の馬の顔あかく見ゆ

(8) 小夜時雨ふりくる音のかそけくもわれふる里に住みつくらむか

千櫨の作歌生活は大正十三年頃から昭和二年八月まで第三期としてみる事が出来る。この頃の「アララギ」誌は島木赤彦の影響が強く、昭和十一年には九首、十二年には六首が載った。アララギに自己の歌をのせるのも自由ではなかった。昭和十三年四月に歌壇の弊風を拭去るために雑誌「日光」が発行された。この時から歿年に至るまで千櫨の歌風は第三期を形成するであろう。これに集った歌人は古泉千櫨・北原白秋・前田夕暮・釈迺空・木下利玄・土岐善麿・川田順等であった。千櫨はこの中で自由に第三期の作歌生活が続けられた。この十三年には百二十首以上の歌を「日光」を中心として発表しているのである。

(1) 秋さびしもののもしさひと本の野稗の重穂瓶にさしたり

(2) 秋の空ふかみゆくらし瓶にさす草稗の穂のさびたる見れば
(3) 山の木に霧ながれつつ溪のべにうすくれなゐの秋海棠の花

(4) のぼり来し山のいただき草生にはしづけく咲けり薄雪草の花

(5) わが子らとかくて今日歩む垣根みちペンペン草の花さきにけり

千櫓の晩年の歌風は自然の観照においても清澄さが加わってきているが、しかしその清澄さの中には人生の寂しさが漂っているのである。そして平静さの中に哀愁と寂寥とを感じしめるものがあるのは否定できないであろう。その一生は貧しい生活の連続であり、その貧しさはしばしば歌の中に悲しくもあたたかく表現されているのは、彼の人情味の豊かなところから来ているようである。その歌は全体としてやさしく豊かな情趣を湛えていたのであり、写実的なものと主情的なものがつねに調和された中に彼独特の歌の世界が形成されていたといえるであらう。

(四)

近代短歌史においてアララギ派歌人としては左千夫・赤彦と並んで三大歌人としての本質を持っている者として斎藤茂吉をあげることが出来るであらう。茂吉は近代短歌を確立した歌人の一人であり、写生主義の中で鋭い近代的感覚を以てかつてない新しく深い近代短歌の世界を創造した歌人である。その歌は処女歌集「赤光」から第十七歌集「つきかげ」に至るまで十七冊の歌集を出し、その作られた短歌は一万四千余首に及ぶものである。

この歌人の世界は近代と現代を通してまことに一大偉観であるといえる。茂吉の短歌生活は明治三十八年に始まり、昭和二十八年に終る四十八年の長きに及んでいる。茂吉は明治十五年（一八八二）五月十四日山形県南村山

郡掘田村において農業を営む守谷伝右衛門の三男として生れたのである。その小学校と中学校時代のことは省くこととし、彼が第一高等学校の三年のときに日露戦争が起っており、明治三十八年一月に正岡子規の「竹の里歌」を読んで非常に感動し、このときから短歌の道に進む決心を持ったといわれる。その六月に一高を卒業し、七月一日に前に寄寓していた浅草医院の斎藤紀一の養子となった。そして九月に東京帝国大学医科大学に入学したのである。茂吉はこの三十八年から作歌をしており、第一歌集「赤光」の中に収められている。明治三十九年三月の初めに伊藤左千夫を訪ねてその門下となっている。明治四十一年一月に「馬酔木」が廃刊となり、二月になって「アカネ」が創刊され、さらに九月には「アララギ」が創刊され、この創刊号から数号に亘って茂吉の歌がのせられていることは注目すべきことである。四十二年二十八歳のときに鷗外の家で催された観潮楼歌会に出席して、鷗外をはじめ与謝野寛・上田敏・北原白秋・平野万里・石川啄木・吉井勇などを識った。ここではアララギ派の歌人と明星派の歌人が会ったことであり、写実派短歌と浪漫派短歌の会合であって、両派の交流ということにおいて大きい意味があったようである。明治四十三年十二月東大医科大学を卒業し、翌年二月から東大医科大學副手となった。この年から更に精神病学を専攻することになった。茂吉の作歌生活に大きい意味のあったのは大正二年五月二十三日生母いくの逝去のことである。「赤光」の中で生彩を放っている「死にたまふ母」の一大連作はこのときのものである。大正三年四月斎藤紀一の長女輝子と結婚した。これよりさき大正元年十一月東大医科大學助手となり、これより大正六年一月まで続いている。大正六年十二月長崎医学専門学校教授となり、同月に長崎病院精神科部長を嘱託された。この間に短歌を作り、歌論を書き、他の歌人とも論戦をしているのである。大正十年四十歳で文部省在外研究員となり海外留学の途についた。大正十四年一月帰国した。大正十五年東京府下松原村に青山病院を復興し、開業許可となりその経営に当った。その後は青山脳病院の責任をとりながら作歌

生活に、研究に意慾的に進み、万葉集の研究に卓抜な業績を示した。また近代短歌の研究にもすぐれた業績を示し、とくに昭和二十七年五月から「斎藤茂吉全集」五十六巻を発行しはじめその翌二十八年二月二十五日に自宅で逝去した。近代歌人としてすぐれたものばかりでなく、万葉集の研究者として、また近代短歌の研究者として、三方面に大きい業績を残したのである。

近代短歌史における屈指の大歌人として茂吉を認めることが出来るのであり、その作歌生活は四十八年の長きに亘っており、子規・左千夫・啄木などにくらべるとその作歌の年限において、また作られた歌数においても非常な相違がある。その歌数一万四千首という歌人は茂吉の外に求めることは困難である。これは近代短歌史だけでなく、日本の短歌史全体においても稀有のことである。この大歌人の作歌生活をどのようにみるかということとは色々問題があり、困難なことでもあるが、いまこれを大体三期に分けて考えてみよう。第一期は明治三十八年から大正十年までの十七年間とし、第一歌集「赤光」から第三歌集「つゆじも」までの世界であるとする。第二期は大正十一年より昭和十三年までの十七年間で、第四歌集「遠遊」から第十二歌集「寒雲」までの世界であり、第三期は昭和十四年より二十七年までの十四年間で、第十三歌集「のぼり路」より第十七歌集「つきかげ」までの世界であるとすることが出来るであろう。この三期説又は四期説は色々な観点から考えられるのであり、同じ三期説でも考え方によってその区別は異ってくるであろう。四十八年の作歌生活を十七年と十七年と十四年とに分けることによって茂吉の世界の意味づけが可能である。そして第一期の代表的歌集は「赤光」であり、第二期は「白桃」と「暁紅」であり、第三期は「白き山」であるということが出来るであろう。このように三期に分け「赤光」と「白桃」と「白き山」より十数首宛をぬき出し、これによって茂吉の世界を一瞥することにした。 「赤光」の中から十五首を選んでみよう。

(1) かぎろひの夕べの空に八重なびく朱の旗ぐも遠にいざよふ (雲・明治四〇)

(2) 岩ふみて吾立つやまの火の山に雲せまりくる五百つ白雲 (雲・同上)

(3) 真夏日の雲のみね天のひと方に夕退きにつつかがやきにけり (雑歌・明治四一)

(4) 山路わだ紅葉はふかく山たかくいよよ逼り来わがまなかひに (塩原行・明治四一)

(5) いはれ無に涙がちなるこのごろを事更ぶともひと云ふらむか (細り身・明治四二)

(6) 現身は悲しけれどもあはれあはれ命いきなむとつひにおもへり (同上)

(7) やはらかに濡れゆく森のゆきずりに生の命の吾をこそ思へ (うつし身・明治四四)

(8) はるの日のながらふ光に青き色ふるへる麦の嫉くてならぬ (同上)

(9) かぎろひのゆふさりくれど草のみづかくれ水なれば夕光なしや (同上)

(10) 紅き日の落つる野末の石の間のかたけき虫に聞き入りにけり (秋の夜ごろ・同上)

(11) はるけくも山がひに来て白樺に触りて居たり冷たきその幹 (ひとりの道・同上)

(12) さにはべに百日紅のはそり木に雪のうれひのしらじらと降る (雪ふる日・同上)

(13) さびしきびしいま西方にゆらゆらと紅く入る日もこよなく寂し (おひろ・大正二年)

(14) ひさかたの悲天のもとに泣きながらひと恋ひにけりいのちも細く (同上)

(15) わが命つひに光りて触りしかば否といひつつ消ぬかにも寄る (同上)

この歌集「赤光」は茂吉の第一期の世界を代表するものであるとともに茂吉の短歌の世界全体の代表的なものでもある。茂吉の短歌はこの第一歌集により赤々と光を放ったものであるとも云えるであろう。「赤光」はその言葉の通り赤々とした自己燃焼の世界であり、まことに強烈な抒情性の表現の世界であった。子規や左千夫を師と

しながらも、左千夫の世界を越えてより深い近代性を内に持つており、その中で自我の解放を歌いあげた新しい短歌の世界であったということが出来る。この「赤光」の中で自然に観入してその生命を写し歌うという実相観入の姿が既にみられるのである。この「赤光」の中に収められた八三四首は茂吉が二十四歳から三十二歳までの歌で茂吉の初期の歌とも云われるが、茂吉的世界を決定的たらしめたものであるとも考えられる。この「赤光」の世界の中には従来の「アララギ」派短歌の世界をより拡充したものがみられ、強烈ともいうべき近代的抒情が表現され、それに深刻な人間の苦悩と自我の表現はすべての生命を写生することにおいて真実なものが形成されているのである。茂吉自身再版の序で「赤光は過去時における私の悲しい命の捨てどころであった」と述べているが、まことに生命をかけた強烈そのものの青春の記念碑であったといえるであろう。この中では浪漫性と写実性が見事に調和して一つの生命となっている。この「赤光」に次いで「あらたま」も特色ある歌集であるが、第三期の世界の特色を現わしている「白き山」の歌を若干抜き出してその世界を具体的に作品の上でみたいと思う。

- (1) ここにして心しづかになりけり松山の中に蛙が鳴きて
(松山・昭和二二)
- (2) しづかなる亡ぶるものの心にてひぐらし一つみじかく鳴けり
(鳶・同上)
- (3) 道のべに琵琶の花咲きたりしこと何が罪ふかき感じのごとく
(ひとり歌へる・昭和二二)
- (4) くらがりの中におちいる罪ふかき世紀にゐたる吾もひとりぞ
(同上)
- (5) 月の夜の川瀬のおとの聞えくるデルタあたりにさ霧しろしも
(同上)
- (6) 月読ののぼる光のきはまりて大きくもあるかふゆ最上川
(同上)
- (7) まどかなる月の照りたる最上川川瀬のうへよ霧見えはじむ
(同上)
- (8) 最上川の流のうへに浮びゆけ行方なきわれのこころの貧困
(同上)